

プラネティストが行く 16

日本の若者を甦らせる 放浪ニートのすすめ

中村 繁夫

写真・桃井和馬

「お客さん、足がパンパンですね」と流暢な日本語で聞かれたので驚いた。オーストラリアのケアンズに滞在したとき、中国の若者がレッジマツサージをしていると思ったら、日本の青年だった。日本では就職浪人だが、今のうちにスポーツマツサージと英語の勉強をしておきたいと言っていた。秋葉原や渋谷では見つけにくい、遅しさと爽やかさを持っていた。外国で仕事をしながら語学などを習得することを、ワーキングホリデイと呼ぶ。これらの若者を「放浪ニート」と呼ぶのは失礼かもしれないが、日本でくすぶっていた若者に変化が起きている。

09年春の日本の大学進学率（短大含む）は、56・2%と7年連続上昇した。逆に就職率（大卒のみ）は、68・4%と前年比1・52%の減少で、アルバイト比率は2・3%、就職していない卒業生は12・1%と増加した。進学率は上がっても就職率は下落している。いわば高学歴ニートが増えているのだ。そして、彼らは「定住型ニート」から「放浪ニート」へ変化しつつある。

私はニートの意味を本来の〔Not currently engaged in Employment, Education or Training〕「失職中で教育も職業訓練も受けていない若者」ではなくて「情緒に欠けた失職中で職業訓練を受けない若者」と定義している。つまりEducationをEmpathyに置き換えると日本の実情に合っているのではないかと思う。

Empathyとは「共感」力という意味である。高等教育を受けても社会に馴染めない若者は、情熱不足のしらせ世代になってしまう。今の日本はレールから外れると、下流社会に組み入れられてワーキ



ングブアの道しか残っていない。偏差値教育、派遣切り、自殺の多発など、閉塞感に満ちた社会である。天下り官僚や団塊年齢層の既得権益は若者の格差社会の上に成り立っている。今の日本で政治や社会問題に興味を持ってと言うほうが無理な話で、若者達が共感力を喪失してしまうのも当然である。

私も若い時は「放浪ニート」として数年間ヒッピー生活をしてきたが、今になって思い出すと、その時の体験が後々になって役に立ったと言えなくもない。当時は70年安保に敗北した若者が閉塞感を感じEmpathyを失った。学生時代は何を見ても特に共感が湧くことはなかったが、世界を旅するうちに「人の情け」や「自然から学ぶ感動」が、自分を変えてゆくのが実感できるようになった。日本の日常の馬鹿馬鹿しさに気がついたのも、外から日本を見た時であった。つまり日常生活から離脱することで、飛躍的に自分を変えるチャンスが増えたのである。

放浪という環境条件には「多くの動機付け」がある。「見知らぬ場所を見聞できる喜び」「意外な自分を発見する感動」「過去との決別」「新しい友人との出会い」。こうしたメリットがあるからこそ自発的に新しい探検や冒険を求めるようになるのだ。

非日常（放浪生活）に入った当初は不安であるが、徐々に環境に適応するものだ。日本の若者が日本の政治や社会に共感できなければ、日本らしさは失われるばかりである。若者の海外生活は、日本の良い部分を見直すチャンスである。彼らも視野が拡がり感性や考え方が変わってくるように思う。

「日本の常識は世界の非常識」とよく言われるが、視点を変えてみて初めて客観的に見えてくるものがある。閉塞した日本社会に居る必要はない。世界は狭くなったといっても我々日本人が知らない世界がいっぱいあるのだから。

〔なかむら・しげお〕1947年生まれ。レアメタル専門商社・アドバンストマテリアルジャパン（AMJ）社長。近著に『レアメタル超入門』（幻冬舎新書）『ももい・かずま』1962年生まれ。フォトジャーナリスト。現在、地球写真プロジェクト『Eye witness』を展開中。



ブラジルでヒッチハイクをする、放浪ニート時代の筆者（当頁）。
夜の渋谷。そこは、夢を描けない若者たちが仲間を求めて集まる空間でもある（前頁）。